平成２８年度　鳥取県ＰＴＡ協議会　教育懇談会（小グループ討議）

進行　１．司会挨拶
　　２．自己紹介
　　３．趣旨説明
　　４．基調提案･･･資料に沿って
　　５．討議

１グループ：メディア２１：００運動

基調提案･･･資料に沿って

Ｈ２７インターネットの利用に関するアンケート結果の報告

・児童・生徒全体の８７．６％がスマホ・PC・携帯ゲーム機等いずれかの機器でインターネットを利用し、2 時間以上の長時間利用の児童生徒もかなりいる。
・小学生の段階からメール・ＳＮＳを利用し、「悪口を言われた」「知らない人から連絡があった」などトラブルを経験している児童生徒もいる。
・フィルタリングの設定率が低い。「親のスマホだから」「保護者が管理できるから」「子どもを信用しているから」「必要性を感じない」
・各家庭だけが頑張っても歯止めが効かない現状がある。
・ルールを作り、それを守れる子どもづくり。
・どうしてこのような状況になったのか？
　自分のこととして捉えられていない。自分には大丈夫。（他人事）
　あまりに強く制限すると、わが子が仲間はずれになるのではないかとの思い。
　子どもに言われたら甘くなってしまう。
　自分の問題として捉え、全体として子どもたちを守っていくことが必要。
・取り組みの方向性
　今までも学校では著作権保護や個人情報保護などネットモラルについては指導している。保護者についても研修を実施しているがその効果を検証する必要がある。
　子どもたち自身が自分のこととして、そして全体のこととして考え、自分たち自身でルールを作る方が効果的である。

啓発活動について

〇メディア２１：００運動について
・メディア２１：００の普及啓発。（県 P・県教委・ケータイ・インターネット教育啓発推進協議会の連携）
・賛同団体を増やしていく。
・青少協と連携し、メディア２１：００運動を掲載した「うちわ」を配布。（県内の主要な祭り）
・フィルタリング設定手順など動画コンテンツを作成。

〇文科省の資料を見て
　子どもたちがスマートフォンでしていること

・ＳＮＳ、動画の視聴・投稿。
・安易な情報発信は犯罪になる可能性がある。
・企業は過去の投稿等を検索している。（就職で不利益があるかも）
〇ネットパトロール事業について
・アカウント放置や個人情報公開など県内でも少数報告されている。
・ＳＮＳでは言葉の行き違いや冗談が深刻なトラブルになる。

事例紹介

〇摂津市立第三中学校
・全生徒、校区内小中対象のアンケートを実施。生徒会が論議し、保護者や地域に啓発した。
〇守口市立樟風中学校
・アンケートを生徒・保護者・地域に配布。結果を踏まえ生徒会とＰＴＡが協議しルール作成。
〇山梨県ＰＴＡ協議会・山梨県高等学校ＰＴＡ連合会・山梨県私立中学高等学校ＰＴＡ連合会
・ＰＴＡ3団体による基本ルール作り。

参加者意見

参加者　難しい問題。ニュースでもポケモンＧＯのことを報道しているが、大人がちゃんと使えていない。それを子どもにうまく使えと言っても難しい。

県教委　親がまず見本を。子どもは親の使い方を見ている。

参加者　親の知識が足りない。親の意識を変え、危険性を発信していかなくてはいけない。
知らないから怖い。知っていれば怖くないのでは。

県教委　・スマホに情報をのせるというのは、渋谷のスクランブル交差点で個人情報を書いた看板を掲げるようなもの。
・子どもたちは最初ラインを仲間うちでやっているが、他の子や他のグループが加わったりし、ある時には仲たがいをすることもある。スマホの使い方により長期的ないじめのきっかけや、たった一言で人の生き死にまで追い込んでしまうこともある。
・いくら研修しても、親にも子どもにも行き届いていかない難しい問題。
・ネットパトロールでは修学旅行で禁止されているスマホを持込、撮った写真を交換しているうちにネットに流出した事案や、過去使っていたアカウントが乗っ取られた自分と関係していないアダルトサイトに使われているような事案、喫煙の写真、ＩＳの処刑を真似た動画を投稿した高校生など実態があり、こども未来ネットワークが見つけ本人、学校、教育委員会に連絡している。
・もう、わかっているという保護者もいるが、そういう感覚が「まあいいか」となってしまい、子どもたちの実際に親がついていけない現状がある。
・研修の中には常に新しい情報があるという意識や危機感が必要。

討 議

司　会　メディア２１：００は２１時以降、友だちを巻き込むようなメディア使用をやめ、相手の時間を尊重しようという緩やかな運動。
県Ｐとしては様々な団体の協力も得て広めてきているが、始まったばかりでこれをどう広めていくか、一つは米子市のスマホ持たせない運動と整合させながら進めていきたい。
子どもたち自身がメディア問題課題の解決できる環境を提供できないか、また、子どもたちが参加し、自分たちが考え解決策を考えていく「スマホサミット」のようなものを鳥取でも実施した

い。
先々にはメディア問題だけでなく、いじめや様々な問題に取り組む組織を作り親として協力することができないか。

参加者　自分の家では、子どもには２１時以降はスマホを使わせていない。でも、自分たちは２１時以降も使っている。それで良いのかとの思いもある。
親子ともメディアの危険性を知らないところがあるのではないか。もっと事例を知る必要がある。

司　会　メディア２１：００は親が決めたルール。守っている子どもと、守っているふりをしている子がいる。
親たちが決めたルールで、子どもたちが納得していないでは。
子どもたちがルールを決め、子どもたちが見直していくことが必要。それが「スマホサミット」のイメージ。

参加者　時間をかけて取組む問題。メディアをシャットアウトするのは無理。
子どもと大人とメディアの使い方が違うので、この問題は親と子を分離して考えても良いのでは。

参加者　高校生の我が子が、意図せず他人の写っている写真をＳＮＳに投稿しているのを見かけ削除させた。子供達は本当にメディアの個人情報保護を知っているのだろうか。

司　会　システム（知識）とメンタル（道徳）の両方の教育が必要。

校　長　携帯電話が出始めの頃は問題のある子が使用していた。
高校になれば、ほぼ 100%の子どもが携帯電話を持つ今、持たせない指導は難しくなったと思う。
保護者がメディアの研修に、またかという感覚を持っている。
子どもたちは間違ったメディアの使い方の結果がどうなるかわかっていない。想像力の欠如。
心の部分（道徳）について教えていくことが必要。

司　会　保護者の中に、メディア問題に飽きた人、知らない人が増えてきた。
親が新しい技術についてきていない。技術が変わっても道徳は変わらない。

校　長　メディアは悪ではない。これからは使い方を教育していく。メディアが使えないと生活や仕事ができない時代になっている。
しかし、時間は無限ではない。今児童生徒には学習時間が足りていない。テレビやゲーム、インターネットに時間を費やせば睡眠不足にもつながり、学習成績にも影響する。
ストップをかけるのは家庭。
参観日の授業でもメディア問題を取り上げている。

司　会　札幌市はアウトメディアの取組をしている。
メディア研修に保護者を呼ぶには、いま旬の話題で保護者が食いつくことを取り上げ、その中にうまく問題を盛り込む、そうすると人の集りが断然多くなる。
メディアの学習は小学校から取り組むことが大事。スマホサミットでは中学生を中心とするが、小学生高校生を縦軸としたい。
身近なところでネットいじめがあった。（ライン外し）
友人や先生方（現実社会）によって立ち直ったが、親がどんなにメディアやＩＣＴの知識があっても、システムで解決することは出来ないし、子供の世界に介入することができない。
瞬時にいじめが進行する恐ろしさを実感した。

参加者　メディアを持たせないというのも大きな選択。ただそれに固執するのも問題。
今までは親と子が別々にメディアの研修を行っていたが、参観日にメディアの学習をすれば親子で問題の共有ができるし、普段研修に参加しない保護者も参加するのでは。

参加者　子どもが親の言うことをきくのは小学生まで。中学生になれば自分たちでルール作りをすることが必要。
人の付き合いが現実から仮想へ向かっている。現実社会でのつながりを大事。

参加者　通信教育にタブレットを使用しており、取り上げることは不可能。
良し悪しは親が教えていかなければいけない。

校　長　子どもたちは反応を欲しがっている。子どもは注目されたいと思っている。現実社会で満たされないところをネットに求めてしまう。

司　会　事例、特に県内の事例について親は敏感。県のＨＰで公開をすれば、より興味を持ってもらえるのでは。

県教委　「愛着障害」が問題になりつつある。幼児期、乳児期のメディア使用も原因の一つと考えられている。
子育ての問題も含め研修する必要がある。

まとめ
・県Ｐの組織は小・中で構成されているが、やがて仲間になる子育て世代とも協力していきたい。
・メディア２１：００運動の普及啓発を行っていく。
・スマホサミットの実施に向け、取り組んでいく。

２グループ：　学力とは

基調提案

司　会　<u>鳥取県が考えている学力とは</u>どういうものか。

県教委　単なる学力ではなく、学んだ知識を活用する力を大切にしなければならないと考えている。グラフ、資料は読み取れるが、それを活用できない、発信力・表現力の低下が懸念されている。
全国学力・学習状況調査で、学力・学習状況を調査し、つまずきを把握、授業改善につなげていきたい。

司　会　<u>保護者として学力向上のため何をすべきか</u>。

県教委　基本的な生活習慣がしっかりしている子は学力が高い。（朝食を摂る・ゲームをしない・睡眠時間の確保等）また、家で子どもがゆったりできているかも大切と思う。（例：読書ができる環境か）そのために親がどう過ごしているかは重要で、子どもに勉強させて自分はテレビや携帯では意欲向上を図ることは難しい。

司　会　<u>子どものやる気スイッチは</u>。

校　長　自分たちで考え行動できる自治力のある子どもたちを育てたいと考えている。いろいろなルールを守れないかもしれないけど守っていこうとする生徒、それが学力向上にもつながっていくと考える。そのためには、教師が指導するだけでなく、子どもたちに考えさせる場面を大切にしなければならない。

校　長　切磋琢磨する生徒を目指している。子どもたちを集団で育て、集団の中で自分を磨こうとすることが大切と考える。

県教委　子どもたちのつぶやきにヒントがあるように思う。「へ～」「ふ～ん」の授業は知識だけで終わる。「なるほど～」「そ～だったんか～」「～ということは」が出てくる授業は次につながる学び。その学びを生活に生かすことが大切で、自分の学習が人生につながっていることを知ると、

頑張らなければということにつながる。

司　会　　保護者さんからご意見、ご質問は。

保護者　　子どもは先生の知識より生き方を見ている。もっと先生の価値観を出せばいいと思う。

校　長　　大人の代表としての教師、いろんな大人がいることを子どもたちに知ってほしい。

保護者　　子どもたちは好きな先生からの指導は快く受け入れる。子どもたちに人気のある先生が極めて少ないと感じる。教員免許を取得したら先生になれるのではなく、本来そこから如何にして人間力を上げていくかで指導力の向上も図られるのだと考えるが、そういう視点でのスキルアップの場はあるのか。

校　長　　様々な研修制度はあるが、教師の成長は生徒、保護者、地域にある。子どもの目をしっかり見ることが基本。そして地域を歩くべきだ。地域を歩けば必ず見えてくるものがあり、それが教師を成長させてくれる。次の世代に校長として必ず伝えていく。

司　会　　子どもたちに対して魔法の質問はありますか。

保護者　　「何で～しないの？」の答えは言い訳。
「明日からどうする？」の答えは解決が返答になる。（自分で決めさせる）
「今日一日がどう終わっていれば最高？」（自分なりの目標を立てる）

校　長　　目に見えたものを叱るのではなく、どうしたらできるのかを一緒に考えてやる。ヒントは親が与え、子どもは「やった！」という達成感を。子どもも親もゆとりが大切で「待つ」ということが大切。

司　会　　先生と保護者が両輪であるべきと思うが。

県教委　　先生と保護者が向き合うことが大切。

保護者　　どこで親が出ていくか、行き過ぎている保護者も見受けられる。

校　長　　世の中を見ても昔と違いいろんな分野でクレームが増加している。保護者からのクレームは当たり前だと受け止めなければならない。そうでなければ向き合うことはできないし、互いの成長もないのではないか。

司会者　子どもたちのため両者が思いを込めて取り組んでいきましょう。

まとめ　学力とは、基本的生活習慣の確立と安心できる家庭があってこそ身につくものである。どんなことに対しても知りたい、学びたいと思える探求心と学んだ知識を生活の中で活用する力を大事にしたい。学力（学び）とは生きる力の基礎づくりである。

３グループ　：子どもの居場所づくりについて

１．　土曜日の教育活動の現状について小中学校課より説明

子どもたちに社会体験をさせるために平成１４年度から週休二日制が実施された。しかしながら実際は、社会体験等からはほど遠い生活を送っている。　教育行政としては、無目的で土日を過ごす子どもたちを放置できない。改善のため、“土曜日授業”を実施することになった。県下における土曜日の教育活動の割合としては、学校の授業が約２０％、地域の事業等が約８０％である。

土曜日の教育活動は概ね３区分あり、成果と課題が見えてきた。

①土曜授業　（主体が公的・教育課程内）：地域の方が参加する校外学習、総合的な学習・特別活動、学

校行事、ふるさと学習など　実施

成果：開かれた学校づくり、地域・保護者との連携の促進
充実した学習機会の提供
各校の独自性が生まれた
ふるさとに根ざした学習の実現

②土曜の課外授業（主体が公的・教育課程外・希望者を対象）

③土曜学習　（主体が公的なものと公的でないものがある・希望者を対象）

：学力アップ講座、英語検定・漢字検定、体験活動、地域の伝統行事の体験など　実施

成果：参加児童生徒の意欲向上、参加者増加、豊かな教育環境の提供（土曜日の充実、親子のふれあい、学校でできない学びの提供）、地域交流の場、 地域の人とのつながり

課題 ： 内容に即した指導者の確保が困難
教員の勤務体制の整備、 振替確保
児童生徒の交通手段の確保など

参加者より ・・・スポ少に加入していると、 土日に大会が開催されることも多く、土曜授業への懸念の声も聞かれる。

２． 土曜日　（午前） の過ごし方の状況調査から見えること

小学生：習い事やスポーツ、地域の活動に参加しているが28.1％、次いで家でテレビやビデオ・DVDを見たり、ゲームをしたりしているが21.2％

中学生：学校の部活に参加しているが72.9％、次いで家でテレビやビデオ・DVDを見たり、ゲームをしたりしているが8.2％

小中学生共、家でテレビやビデオ・DVDを見たり、ゲームをしたりしているが上位にあることから、 土曜日を実のある活動に充てられていない子供たちが多いことが分かる。

行政の力も借りながら、“参加しやすい地域の中での活動”を増やしていく必要がある。

３． 放課後子ども総合プラン推進事業について

目的：少子化や核家族化の進行、就労形態の多様化及び地域の子育て機能・教育力の低下など、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえ、放課後等に子どもが安心して活動できる場の確保を図るとともに、次世代を担う児童の健全育成を支援することを目的とする。

放課後児童クラブ（保育…生活の場）と放課後子供教室　（居場所…学習・体験・交流の場）が情報の共有を図り、一体的あるいは連携して実施する。原則として、全ての小学校区で実施を目指す。

現在、 三朝町と北栄町で一体型として活動しているが、場所移動に伴う児童の出入りの確認、職員の確保が困難とのこと。

４． 地域の活動で子どもの居場所、活動の場をつくる　（グループ討議参加者の体験談より）

■地域の方の立上げで年に一度夏休みを利用して、一泊二日お寺に宿泊　（小学生対象）

お世話係として保護者、檀家さん、中学生ボランティアが参加する

・これまでお世話してもらっていた子どもたちが、中学生になりボランティアとして参加することで縦の繋がりができる。

・地域の方と顔見知りになれるため、お寺の外での繋がりが増えていく。

■コミュニティ・スクール

・地域総がかりで子どもを育てる。

・学校・地域・社会がバランスをとった関わりを持つことが大切。

■地域の遊び場・集う場所

・学年で行動範囲が制限される　（低学年：住んでいる町区内、中学年：隣の町区まで、高学年：校区内）ので、大人が見ていないと安心して遊べないこともある。地域の中で集える場所ができても、歩いて行ける場所であれば良いが、そうでもない。

・公園や広場、集会所など遊べるスペースがあっても、ボールを打つてはいけない、蹴ってはいけないなど制限があったり、トラブルがあった時の問題解決が難しいために利用していない。

５．　指導や見守り　を行ってくれる人材　（ボランティア）　の確保に関する課題と解決のヒント

■課題

・ボランティアの年齢層が上がっている　（60～70歳代）　のに、次の世代の参加が薄い。

・義務教育が終わると親も子も地域活動に関心がなくなり、地域との関わりが少なくなってくる。根本的には色々なことが地域の問題であるのだが、地域全体で子どもたちを育てようという意識が低い。

■解決のヒント

・高校生が指導者として、小中学生と交流を持てるような地域の活動を行うことが地域に根づく人材の育成に繋がるのではないか。

・子育てを卒業した年代の方に頼るばかりでなく、自分たち自身が主になって取り組んでいかないといけないのでは。　忙しい中でも、出来ることはあるはず。

・有償ボランティア的なことも必要ではないか。（実費負担の考慮等。）

・最近の小学校５・６年生はリーダー育成をしている。小さい頃から将来の地域内でのリーダー意識を育むことをしている。この活動の推進と地域内での連携を図る。

まとめ　子どもの居場所をつくるために、まず現状を知り、自分には何ができるのかを考える。学校、地域及び行政の連携を図ることで情報を共有し、協力し合うことで、子どもたちにとって安心・安全に過ごせる場を提供していくことができるのではないだろうか。

４グループ：**今後の学校の在り方について**

①　今なぜ、学校と地域の連携・協働が求められているのか

・これからの厳しい時代を生き抜く力を育むためには、困難に立ち向かい、乗り越える力が求められる。子供たちは学校のみでなく、地域社会とのつながりの中で、豊かでたくましい人間に成長していく。

・これからは、学校と地域は「連携」だけでなく、「協働」つまり、一緒に協力していくことが

大事である。
・地域から応援してもらえるような学校作りを進めていく必要がある。
・地域創生の観点からも、「地域の将来を考える人間」「地域を担っていく人間」を育てることが求められる。
・これからの学校と地域の連携・協働の姿として、「学校」と「地域」は、相互補完的にお互いの役割を確認し、協働関係を築いていくことが大切。

② コミュニティ・スクールの仕組み

・コミュニティ・スクールとは、任命された保護者や地域住民の方々が一定の権限を持って学校運営に参画する「地域とともにある学校」の仕組みであり、『学校運営協議会』を設置している学校を指す。
・一定の権限は 3 つあったが緩和され、[校長が作成する学校運営の基本方針を承認すること]→必須。[学校運営について、教育委員会又は校長に意見を述べることができること]→必須ではない。[教職員の任用に関して、教育委員会に意見を述べることができること]→必須でない。ネックになっていた項目が必須でなくなったため、導入しやすくなった。

③ 鳥取県の現状、学校と地域の連携・協働による取り組み事例

・すでに導入している南部町の南部中学校では、年 3 回交流会を開催しており、地域交流、環境整備の取り組みをおこなっている。
・岩美町では、[職員任用に対して意見を述べることができる]ことに警戒し、導入を見送っている。
・鳥取市では、必須でない権限を取り払い導入した。また、学校単独で取り組むところが多い中、最初から中学校区で取り組んでいる。（南中校区、桜ケ丘校区）
（文科省では、学校単位よりも中学校区単位での導入をすすめている。小学校と中学校の垣根を取り払い、中 1 ギャップの解消にも繋がる。）
・鳥取市では、中学校区単位で、出張授業など教員の小中連携をすすめている。
・境港市の誠道小学校と第 3 中学校では、小中一貫校移行の話が出ている。小中両方の給食を賄える給食センター完成した。
・国府町では、2 小学校の連携で、通知表の評価方法や、教科書会社を統一した。その一方で、2 学校間では、勉強に対する意識が全然違う。
・美和、神戸校区では、小中で一緒に遠足に行っている。小規模校ならではの連携をおこなっている。
・境港市では、各校でプールの耐用年数の期限が近いが、全校の修理は財政的に難しい。市民プールを改修してすべての小学校が使用する案あり。これもある意味、連携の一環といえるのではないか。
・倉吉市は、元々オリジナルのコミュニティ・スクールがあった。十分対応できるという判断で今年度より全小学校で正式に取り組むこととなった。

まとめ

・先ずは形式にこだわらず、学校と地域がやりやすいようにやっていくべきである。
・ＰＴＡは地域の一員でもあり、学校と地域を結びつけることが出来るのがＰＴＡである。ＰＴＡもコミュニティ・スクールをサポートしていきましょう！

５グループ：**スポーツ活動における健全育成について**

「子どものスポーツ活動ガイドライン」配布

・勝利至上主義のイメージは？

県教委：小学校の保護者のヒートアップがあるのではないか。保護者の実際の経験もある。
個人的な思いも含め子どもたちはいろんな経験をしたほうがいいと思っている。

参加者：・子どもが野球をしている。当時を振り返ると自分もヒートアップしていたと思う。
・小 1 年の時息子が野球をしたいと言った。自分は剣道がいいのではないかと思いまずは剣道を始めた。剣道は 19 時から 21 時過ぎで寝る時間も遅くなり続かないと判断。自分が根を上げた。
野球に入り楽しい野球をしていた。小 5 の終わりに 3 つの小学校が 1 つのチームになり勝利至上主義の監督が来られレギュラーも 6 年生が 3 人、後は 5 年生になり先を見据えたチームになった。親は何も言えない。練習時間が増えチームは強くなった。結局は監督の思いが尊重されていた。試合に勝つと子も親も気持ちが乗っていくがそれが続くと勝利至上主義の弊害も出ていたのではないかと思う。子どもにとってはいい経験になった。中学校になると強さに関係なく 3 年生からレギュラーになった。勝てたのに、という気持ちにもなった。
・自分たちが子供の頃こんなに親のサポートはなかったと思う。今は親ありきの活動で大変忙しく辛い。土日も遠征があると親の休みはない状態。指導者が怒ると親も萎縮する。子どもとの関係ができているなかでの指導と思うが、「何でできんだ」で分かるのかとも思う。穏やかに指導して欲しい。叱らなくても子どもたちができるようにする方法はないのか。地域性もあるのか西部はいいところを褒めるように見えた。中部はガンガン指導されていると思う。そういう状況が続くと上級生が下級生に同じように厳しい口調になっている。
指導者に練習のことについて文句を言わないようにという決まりがある。親が言いすぎて無くなったチームもある。

県教委：昔から休みを取ろうとしていたが、チーム任せであった。今はガイドラインに沿って練習内容なども和らぎつつあるのではないか。

参加者：・小学校のクラブ活動では 15 年前は小学校の先生が教えてくれていた。10 数年前から先生も帰宅しその地域での活動をしなさいと仕組みが変わり仕方なく保護者が指導していた。
・ソフトテニスの強化校だがきちんと指導してくれる先生がいない、適材適所にまわしてほしい。

県教委：部活等に関しても教育の一環という考え方。スポーツ優先にはなりにくい。人事異動があるのでしかたない面もある。
学校から推薦のあった外部指導者は全てというわけにはいかないが認めている。
外部指導者の方に研修も受けてもらっている

参加者：・野球チームはずっと弱く、子どもたちが 6 年生になりやっといいチームになってきて喜んでいた。校区外からチームに 2 人入部があった。保護者に相談なく監督が許可していた。やっとレギュラーになった子たちが外れてしまったが、監督の勝ちにいきたい気持ちと保護者の地域の子を入れて欲しいという思いが衝突している。地域の体育会が新聞を見ていて怒り、監督と話し合いを持ったが監督も聞き入れてくれない。結

局どちらの子どもたちにとってもかわいそうな状況。収拾がつかず教育委員会に相談に行く予定。

・湖山西小では越境はない。どこの学校から部員が来てもいいとスポ少協議会で決まっている。10 団体あり PTA 会費から補助金で部費が 5000 円ずつ出ていた（まだ 30 周年、当時は全員がスポ少に入っているくらいだった）が、他からも入っているのでお金の使い方をちゃんとしようという事で徐々に減額し来年からは 0 円になる。
スポ少協議会（PTA、学校、指導者、保護者代表）があり、会員が 3 回/年話し合いをしている。ルールや起こっている問題点などをその場で話し合うことで解決している。体育館、グラウンドの使用のルールも話し合いでうまく決められている。大人の守る意識が大切。子どもがのびのびするための話し合いを持っている。
10 団体の結束をイエローレシートを集めることで保っている。子ども達にも立ってもらい「みんなで貯めたものをみんなで使う」意識を持たせる事で勝ちたいとかレギュラーの問題も、次のイエローレシート頑張ろうと逃げ道ができ気持ちがすっきりすることもある。

・親と監督や先生が話をする機会があれば、過度な活動にもなりにくいのではないか。

県教委：要望を聞き入れることはなかなか難しいですがこのような意見が出ましたと伝えます

まとめ　東部、中部、西部の方が集まりいろんな話ができて良かった。特に湖山西小学校の学校、PTA、指導者、保護者代表が話をされていることがいいと思いました。

6 グループ：高校改編について

テーマについて県教委より現状説明・基調提案

（1）概要説明

・「今後の県立高等学校の在り方に関する基本方針」は、H26 教育審議会答申をもとに教育委員会の中で検討して H28.3.19 に策定
・方針の性格、H31～H37 の施策、答申の趣旨の具体的な方向性を示したもの
・今の中 1 が高校に入学するとき、①どんな教育を高校で行うのか（第 1 章）、②その時の高校づくりをどうしたら良いか（第 2 章）が記載されている。

【第 1 章】

・アクティブラーニング　教師が教壇に立つ　⇒　子供たちに主体的に学びを
・国際的な人材育成、ICT を活用した授業、インクルージブ教育（特別支援教育）、本県を支えるキャリア人材育成

【第 2 章】

・生徒が減っていく中で、どういった学校づくりをして行くのかが書いてある。
・学級減や再編成については H31 からのこと、教育内容については H31 を待たずに実施
・H31 から H37 の 7 年間で県内中学生が約 370 名減少する（9～10 学級相当）。
・今から 10 数年前に県内の高校が大幅改編されたのをご存知か？　例えば倉吉産業、倉吉工業、鳥取農業、鳥取西工業、淀江産業技術、日野産業など。当時は 7 年間で 1,200 人減であり、その状況と比較すれば 1/3 程度。それに比較すると、このたびの再編成はそれほど大規模にならないか。
・生徒減に対しては、原則として学級減で対応するとされている。学校を再編成するという方法

は、とりあえず考えていない。
・「県内の学科の配置状況も考慮しながら、複数校を対象とした・・・」と記載があるが、原則は学級減で対応するが、先の見えないことであり、社会動向を見ながら検討が必要であれば、学級減以外の方策で対応するという含みを持たせて記載されている。
・学級減で対応するという方針は出したが、１学年３学級以下の学校が、H17 までは１校しか無かったが、H28 は６校
・小規模校の定義を明確に記載：１学年あたり４～８学級規模を標準　⇒　３学級以下は小規模校
　　岩美高校３　青谷高校３　智頭農林高校３　倉吉農業３　倉吉西３　日野高校２
・小規模校なりの利点はあるが、生徒同士の出合いが少ない、学級数に応じて配置される教員の数が少なくなることで選択科目が少なくなる、学校行事の規模が小さくなる、部活動が少なくなるとかの課題があると言われている。
・小規模校の定員があって生徒数が減った場合の対応
　１学年３学級の高校：入学者数が２年連続して募集定員の２／３に満たない場合は、原則として募集定員を１学年２学級とする。
　１学年２学級の高校：２年連続して募集定員の１／２に満たない場合は、学校の在り方を検討することになる。例えば、分校化や再編など。
・定員割れしたからと言って、直ぐに再編（統合・廃校）することはない。
・全日制の高校は県内２２あり、小規模校の割合は２７％で、全国で見ると中規模程度
・島根県は３学級以下の高校が４７％で小規模化が進んでいる（１学級１校、２学級８校、３学級７校、１６／３４）。広島県は１学級の高校が１０校ある。
・小規模校の課題解決に向けて一つ一つ取り組みが必要。
　生徒数が少ないがために出会う機会が少ないということに関しては、地域との交流の中で異年代交流するとか、ＩＣＴを利用した遠隔授業とか、複数校合同チームでの部活動とか、課題が克服できないかと検討しているところ。
・地区ごとの状況についても違いが見え始めているところ。
　東部地区：７年で２３０名減　　一層小規模化が予測されている。本県独自の施策を実施しながら先進県の良いところを研究して、小規模校でも教育の質を維持できるよう検討したい。
　中部地区：人数は横這いで減っていない。学科で言えば、地区の中にその学科が一つだけという状況。例えば、工業は倉吉総合産業、農業は倉吉農業だけ。それが特徴だが、こうした状況もどうしていくのかを検討していきたい。もう一つの特徴として、普通科の比率が高い。倉吉東、倉吉西、鳥取中央育英。この状況も含め検討していく。
　西部地区：７年で７０名の減　　高専があり募集定員２００名、島根県との移動（通学）があり、こうした状況を踏まえてどうするのかを検討していく。
・国において高大接続システム改革について検討が進められている。
　高校の中身を変える、その一環で学習指導要領を改訂している途中。次に大学側の中身を変えるということを検討中。
　高校を変え、大学を変え、その接続部分を変えていこうということで共通テストを変える検討がなされている。それが大学入学希望者学力評価テスト（仮称）。以前は共通一次と言われていたが、これが３２年度実施予定（今の中２が高３で受験）。内容については現在検討中で、来年度発表されるが、検討状況は非公開であり動向を注視している。
・高等学校基礎学力テスト（仮称）
　高校での学びを身に付けているかを見るテスト。３１年度実施（現在の中３が高３の時）。現在無い新しいテストである。

何回する、誰が受ける、就職に使うとか、何も決まっていない状況。これも来年度発表されるが、検討状況は非公開であり動向を注視している。

（２）質疑応答・意見交換（Ｐ：ＰＴＡ　教：県教委）

Ｐ：子供の数が減っていく中で、学級数が減っているということだが、少人数なりの教育があるのではないか？　学級数を維持して、クラスあたりの人数を減らし、教師のより目の届く範囲で充実した教育を行うという方向性は高校ではないのか？　⇒　教：教員数が決まっていて、実際に定員割れした高校では２名体制で授業を行うなどは事実ある。

Ｐ：学級数が減れば教員数も減るという話なので、益々魅力がなくなる、受験生が減るという悪循環。それなら学級数や教員数を維持して、充実した教育を行った方が良いのでは？　⇒　教：高校入試の倍率が 1.01 とか 1.02。このまま学級数を維持すれば、0.9 とか 0.8 とかになる。他県ではあるのだが、それが良いのかどうかと言う議論も必要。先ほど言われたことも同時並行の検討ではある。

Ｐ：教員数は減っているのか？　⇒　教：減っている。そもそも採用数が減っている。学級数が減っているから必要な教員数が減っている。

Ｐ：講師は多い？　⇒　教：多い。知識だけではなく様々な視点で教員採用している。

Ｐ：必要以上に採用すれば、県として多大の経費を要するのも理由の一つと思われる。　⇒　教：教員数は学級数で決まる。決まっている教員についての給与は国から来る。標準４０人規模の学級数が何校あるかで決まる。鳥取県は１学級３８名で行っている。その差２名分については県が負担している。だから、４０人学級を３５人学級にしたら良いという議論は良くあるが、国との相差を県が見るかどうかである。

Ｐ：簡単に１学級の人数を減らすことは出来ないと言うこと？　教：子供の数が減るからといって、簡単に１学級の人数を減らすことはできない。

Ｐ：国の方針が変われば可能か？　⇒　教：小中学校の場合は４０人学級から減ってきているが、高校の場合は４０人のまま。

Ｐ：今年鳥取西高が１クラス減り、不合格者は私立に入学して私立高校の人数が多くなった。私立の定員をオーバーして、教員が不足しているなどと聞く。近年、東部では普通科志向が強くなっている。子供のニーズと高校改編があっていない。一方で定員の半分の高校もある。⇒　教：難しいところ。地域産業も大事にしないといけない。専門高校、以前は職業高校と言っていたが、鳥取湖陵や鳥商などは、卒業したら多くが県内就職している。鳥西や鳥東などの進学校は大学等に進み、多くが県外に出る。高校を卒業して県外に進学し、再び県内に帰ってくる割合は鳥取県が地番低い。生徒希望の多いところを残して少ないところを再編すれば、全てが普通科となる。普通科にすれば、県内産業を支えることができない。そういったバランスを保つために鳥取西高が１学級減となった。

Ｐ：単純に 35 人で７～８学級にすれば良いと思っていた。そういった事情があるとは。

Ｐ：定員割れの高校はあるのか？　⇒　教：鳥取工業、智頭農林、岩美、青谷、倉吉農高など

Ｐ：米子南の調理コースは２倍でニーズが多い。　⇒　教：施設のことがあるので、単純に定員を増やすわけにはいかない。

Ｐ：日野高校も総合学科で、良いとは思うが地理的に不利なのか。

Ｐ：総合学科は西部だけか？　⇒　教：青谷高校、米子高校、もちろん日野高校も。その他緑風高校、米子白鳳が定時制の総合学科になる。

Ｐ：島根県は４７％が小規模校だが、特色のある高校もある。県内にも青谷とか智頭とか地域の特色があるので残していけば良いと思うが・・・。残すのであれば、その高校のメインというか一押しというか、それが打ち出せれば受験生は確保出来るのではないか。　⇒　教：島留学（島根に留学）という県外募集を行っている。隠岐島前高に 79 名の島留学生が在籍しており、

寮では無く民泊形態をとっている。本当は学級減の予定だったが、生徒が増えて復活したという状況。津和野高校とか、もともと寮があって県外募集を大々的にやっている。鳥取県でも今年度推薦入試でやり始めたが、知名度が低く数名しか入っていない。隠岐島前高は海に囲まれており、生徒が生き生きしており、全国から注目を集めている高校の一つ。

Ｐ：次年度は、どのような高校が県外募集するのか？　⇒　教：まだ発表になっていない。昨年度は智頭農林、八頭、境、中央育英、倉吉農高など。県外の移住相談会などで説明するようにはしているが、決定したらＨＰなどでＰＲする予定。ネックは受け入れ先。寮があるのが中央育英とか日野高校ぐらいしかない。３年間の民泊となると受け入れ側に抵抗感がある。

Ｐ：実際に県内にも入学者がいるか？　⇒　智頭農林に１人いる。宿を借りて通学している。

Ｐ：智頭町とかは、民泊とか町おこしとかに取り組んでいるので、高校などを巻き込めば効果が上がるのでは。　⇒　教：金銭的な部分か。民泊なら１泊 5,000 円程度としてこれが１ヶ月分となると高額。高校生にとって負担は不可能。民泊側とどう折り合いを付けるのかという問題。民泊させると３年間はずっとその部屋を貸すことになる。民泊させる側にその辺の制約が生まれる。越えないといけないハードルがある。

Ｐ：卒業してからも住み続けているのか？　⇒　隠岐に残る生徒も何人かいて、隠岐を活性化している。

Ｐ：そういったことがあれば、智頭町もいくらか支援すればよいのに。村岡高校がある兵庫県村岡町は、地域の方がボランティアで下宿を運営していて、町が毎月の費用をいくらか支援していている。地元市町村の協力がないと難しい。そのまま住んでいただいて地元の活性化につながればと思う。

（３）私立の学校について概要説明

県内には、いくつかの私立高校に加えて、中高一貫として東部に青翔開智、中部に湯梨浜、西部に米子北斗がある。どの学校でも高校からの入学も認めており、中学校と高校が併設している中高一貫校。

（４）再度質疑応答・意見交換（Ｐ：ＰＴＡ　教：県教委　徳田氏）

Ｐ：県立と私立の定員の割合というのは決まっているのか？　⇒　教：公立：私立の募集定員は８：２が目安。今年度は私立への入学生が多かったので、若干この比率が崩れている。

Ｐ：東部では城北や敬愛の人数が増えてきたが、中部や西部ではどうなのか？　結局、県立高校で定員割れを起こしている。　⇒　教：私立は部活動が盛んであり宣伝が上手。学ぶべきところは多い。入学したいなと思う学校紹介映像を作られる。予算化して専門家に任せているのではと思う。

Ｐ：私立は学校の先生が変わらず何年もおられ、就職してからも高校に行って相談したりしている。県立は数年で異動する。先生に親身になって見ていただき、私立に行って良かったとは思ったが、私立は月々の費用負担が大変。県からの補助があるにしても。部活とかが特化しているので野球部やサッカー部の寮があり、部活をやるために入学している生徒も多い。

Ｐ：看護科の高校は米子北しかない。行きたいところやなりたいことを学べるところが良いのかと思う。定員に満たない高校の学科を変えて看護科などを置けば、特色のある高校になりはしないか？　先生の対応の問題があるのかも知れないが。　⇒　教：米子北は、高校を出て、更に専攻科を出てからという状況（５年一貫養成）だと思うが、倉吉市に看護大学ができたし、鳥取市にも医療専門学校ができたので、以前は高校の学科の中にと言う話もあったのだが・・・。

Ｐ：高校の普通科で勉強するよりも専門的に勉強していれば、専門学校に行っても有利なのか？　⇒　Ｐ：我が子の例で言えば、最終的に国家試験合格を目指すためのカリキュラムであり、一

から勉強しているので、特に高校でどうということは感じていない。もちろん、基礎知識があれば、初めの取っつきやすさ、理解度が違うという点はあろうかと思うが。

教：保護者から総合学科がよく分からないという話を聞き、今年、米子高校以外は定員を満たしておらず、青谷高校にいたっては定員の半分。総合学科が出来て２０年近く経つが、十分に浸透していないが、いかがか？

Ｐ：名前が良くないか。普通科とか電気学科とかはイメージできるが、総合学科っていう名称だけではイメージできない。　⇒　教：普通科は大学を目指すための普通科目を多く取り入れる。専門校は農業や工業、商業などの専門科目を何単位か選択する。総合学科は両方で、自分の将来を見据えて科目系列を主軸に学科を選択できる。ただし、１年生でしっかり勉強し、２年生でその道の系列分野を勉強する。専門高校と違うのは、２年生からしか専門の勉強ができない。ただ、単に好きだとか楽だという理由で、自分の進路とは関係が薄い科目を選択するようになったので、最近は系列を決めたら、選択できる科目に縛りをかけるようになった。自分の進路にあった科目が設定されていて、それにあった科目が選択されているのかどうかを検証しないといけないということが答申にも記載されている。

Ｐ：総合学科を卒業するときのイメージがわかない。普通科なら大学とか短大とか、商業とか工業とかなら専門学校とか就職とかイメージできるが、総合学科を卒業しても生徒たちはどこに行くのかが分からないから、親も生徒も向かいづらいのか。　⇒　教：米子高校で言えば、大学進学が１／３、専門学校が１／３、就職が１／３。高校で学んだ進路に進んでいる状況。

Ｐ：米子高校は、それがはっきりしているので定員割れしないのでは。青谷高なんかは定員割れしている。その差なのかと感じる。　⇒　教：学びと将来との関連がどうなっているのかを検証しないといけない部分かと感じる。

Ｐ：もっと県外に向けてＰＲが必要ではないか？　確かに新聞に少し掲載されるのだが、私立はＰＲが上手だから、県外からでも希望があるのでは。小規模校でも特色や良さを情報発信して。我々も知らないことが多くある。

Ｐ：どこまで特色ということを突き詰めていけるのかな。専門的なことはあるにしても。プロを育成するために特化しているとか。もちろん教える側も大変だが。これに特化しています、全国から来てくださいという、それくらいのインパクトがないと県外からは来ない。隠岐島前高は大自然があるが、田舎だからではなく、これを突き詰めているからというものを打ち出さないと県外からは来ない。普通科行って大学を目指そうとする生徒でも、これは面白い、これを通過して次の学校に行くとか就職するとか、強烈なものがあれば、普通科から専門校に変更することもあるのかなと思う。出来るか出来ないかは自分も分からない。でも、アピールするならそれくらいのことが必要。　⇒　教：智頭農林は林業を中心にして募集しているが、林業はえらいとか、つらいというイメージがある中、「WOOD　JOB！」という映画が製作され、林業は格好いいとか楽しいという部分も出さないといけないという話があり、オーストリアでは、チェーンソーをもっていて林業が格好いい職業だそうで、そういった部分を押し出して欲しいという話をいただいたことがある。

Ｐ：それにしてもＰＲの仕方があろうかと思うので、専門家まで頼まなくても、最近は高校の先生でもＨＰ作成など、上手な先生はいるのではないか。

Ｐ：保護者でさえ知らないことがあると思うので、情報発信は大事。選択肢のヒントを提供することが重要。

Ｐ：中々難しいこと。この意見交換をもとに検討してもらえれば良い。これまで知らなかったことを聞かせていただいたし、中学、高校生活は早いので、今の時点で意見交換できたのは貴重なことであった。

まとめ

・少人数学級にして、クラス数や教員数を確保することは、現行制度では難しい。
・普通化志向が高まる中、総合学科の情報が受験生に伝わっていないので、卒業後の姿を発信すべき。
・H31 年度からの高校再編は、原則、学級減で対応するとされているが、専門的な人材育成に特化した学科を設けてはどうかと提案された。
・生徒数減に対応するため、県外から生徒を呼び込むのであれば、より効果的なＰＲ手法をとるべきと提案された。

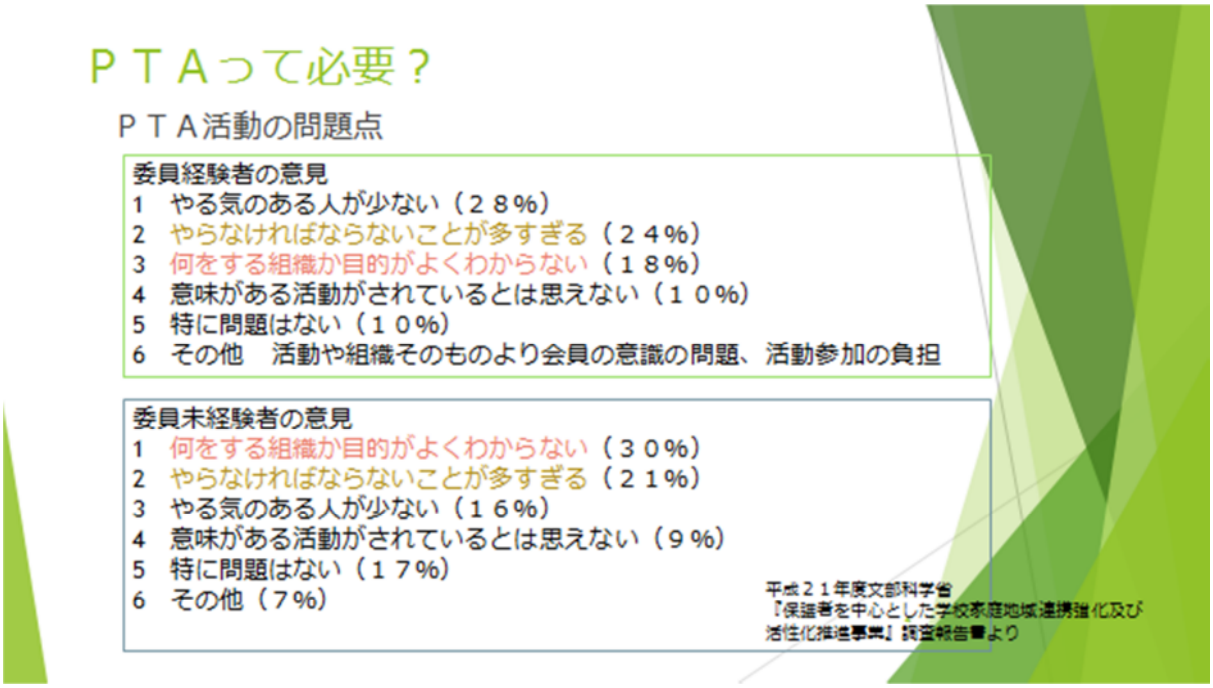
全　体　会

ＰＴＡについて　基調提案：浅雄事務局長

現在、ＰＴＡの置かれている立場は非常に厳しく、ネットでは「ＰＴＡって必要？」「ＰＴＡに殺されそう」といった文言が飛び交っている。単位ＰＴＡの会長は、会員から入会しないと言われたり、熊本市では、加入の意思がないのに会費を徴収されたということで、払い戻しの訴訟がＰＴＡ会長を相手に起こされたりしている。

　このＰＴＡの問題を解決するためには、２本の柱で取り組む必要があると感じている。
一つ目は、理論的にＰＴＡをとらえ「ＰＴＡとは何ぞや」「ＰＴＡの働きとは」「ＰＴＡの実績」等をＰＴＡ会長が語れること。

　平成２１年度文部科学省のアンケートでは、委員経験者の１８％は「ＰＴＡが何をする組織か目的が分からない」と答えており、委員未経験者においては３０％が同様に回答していることからその必要性は明らかである。



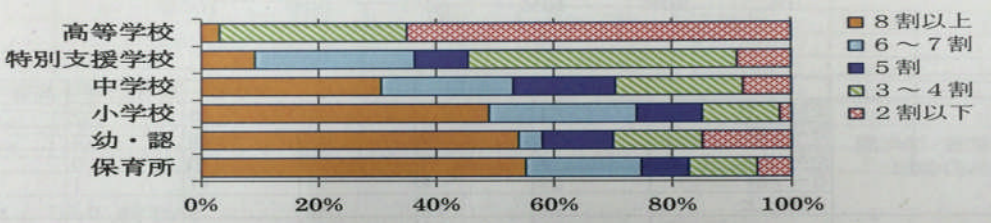
県教委ＨＰに「みんなのＰＴＡ」がアップされており、ＰＴＡについてあり方、組織、委員会等について掲載されているので参考にしていただきたい。

では、二つ目は何か？
鳥取県でも、県教委が平成２６年度にＰＴＡについてアンケートを実施している。

　この中で、ＰＴＡ活動の中でも奉仕、スポーツ活動、読書、安全等への参加は６－（２）①のグラフのように参加率は高い。

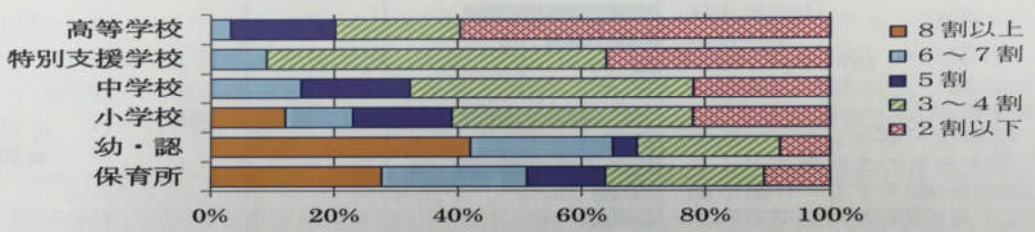
　しかし、研修会、講演会への参加率はどうかというと、６－（２）②のグラフのように５割以上の参加率は小学校では４０％、中学校では３３％と他の活動と比べ低くなっている。

6-(2) ①PTA活動（奉仕、スポーツ、読書、安全等）への保護者の参加



		保育所	幼・認	小学校	中学校	特別支援学	高等学校
①PTA活動（奉仕、スポーツ、読書、安全等）への保護者の参加	2割以下	7	4	2	5	1	20
	3～4割	14	4	17	13	5	10
	5割	10	3	14	11	1	1
	6～7割	25	1	33	14	3	0
	8割以上	68	14	64	19	1	1
	回答数	124	26	130	62	11	32

6-(2) ②PTA研修会、講演会への参加



		保育所	幼・認	小学校	中学校	特別支援学	高等学校
②PTA研修会、講演会への参加	2割以下	14	2	28	13	4	18
	3～4割	34	6	51	28	6	6
	5割	17	1	21	11	0	5
	6～7割	31	6	14	9	1	1
	8割以上	37	11	16	0	0	0
	回答数	133	26	130	61	11	30

こういった現状を踏まえ、今後ＰＴＡで充実させたい活動として何を取り組んでいきたいかという設問には、「保護者同士のつながりづくり」が最も高く、次いで、「子どもの生活習慣づくり」「地域と子どもをつなぐ活動」となっている。

6　（1）ＰＴＡで充実させたい内容

6-(1) ＰＴＡで充実させたい内容についてみると、全学校種で「⑤保護者同士のつながりづくり」が最も高い。次いで、小学校、中学校は「⑦子どもの生活習慣づくり」、「⑩地域と子どもをつなぐ活動」である。高等学校、特別支援学校は「①学校支援」が高い。小学校、中学校でも「①学校支援」は４番目に高い項目である。その他としては、「防災」、「地域行事への参加」、「子どもの健やかな成長のための連絡体制・情報収集」の意見がある。

	小学校	中学校	特別支援学校	高等学校
1	⑤保護者同士のつながりづくり　(70%)	⑤保護者同士のつながりづくり　(56%)	⑤保護者同士のつながりづくり　(91%)	⑤保護者同士のつながりづくり　(59%)
2	⑦子どもの生活習慣づくり　(39%)	⑩地域と子どもたちをつなぐ活動　(37%)	①学校支援　(27%)	①学校支援　(50%)
3	⑩地域と子どもたちをつなぐ活動　(30%)	⑦子どもの生活習慣づくり　(35%)	②研修会　(27%)	②研修会　(34%)

二つ目は、この「保護者のつながりづくり」にあるのではないかと考える。

ＰＴＡの課題は、①役員のなり手がいない②研修会の参加者が少ない③会員の関心・協力がないと言われています。この課題を解決して保護者のつながりづくりをするために何をしていけばよいのか？

全ての活動（奉仕、スポーツ活動、読書、安全、学級活動、学年活動、委員会等）を目的をもって（明確にして）、目的達成のための仕掛け（工夫）を入れながら取り組んでいくことではないか。関心のない人の参加を促す工夫をし、参加したその機会を生かして参加者が少しでもつながることができ、次も参加してみようとなるよう「みんなのＰＴＡ」を参考に、原則に立ち返って取り組みを見直していく必要がある。

一つ目のＰＴＡのそもそも論については、現在県Ｐ総務委員会がＰＴＡの手引きを作成中なので、本日はこの点については取り上げない。

これから体験していただくワークは、二つ目について取り上げる。無関心な保護者に向けて工夫を入れながら活動を企画していただき、出来上がった要項を単Ｐにフィードバックできるようにしたいと考えている。

ワークショップ　　ファシリテーター：人権教育課　寺谷係長

◆アイスブレイク

手遊び

レベル１	右手：グー	左手：パー	「せ～の」で左右を入れ替える
レベル２	右手：グー	左手：チョキ	「せ～の」で左右を入れ替える
レベル１０	右手：チョキ	左手：キツネ	「せ～の」で左右を入れ替える

※簡単なゲームなどで、初対面の緊張をほぐし、気軽なに思いや考えが話せる雰囲気を作る
グループ作りを兼ねることもある

◆グループ内で自己紹介

『子どものころ好きだった〇〇』今日は、好きだったアイドルを入れて自己紹介をする

※相手を知るきっかけづくり

◆企画会議：仮想ＰＴＡとして以下のテーマから一つ選んで活動を企画し要項を作成する

《テーマ》A 研修会「ケータイ・インターネット」
B 研修会「子育て」
C 研修会「食育」
D 研修会「人権」
E 研修会「生活習慣」
F 親子会
G 体育行事

《企画》１　対象（保護者、保護者と教師、子どもと一緒・・・）
２　ねらい
３　開催時期（年間のどのあたりか、単発、学期ごと・・・）

４　講師選定（専門家、地域から、校内・・・）
５　プログラム（形態も）
６　要項作成（模造紙へ）

ポイント・やってよかったなという企画
・関心のない保護者に向けての工夫を入れる
・企画会議中は、他者の意見を頷きながら聞き、建設的に取り上げていく

作成した企画は別紙

総　評　小中学校課　小林課長

本日の体験型の研修で残ったものは、「心がつながった」ということ。アイデア、意見、表情がそれぞれのグループの中で出され、それが見えた。

子どもたちに伝えたいことは、「目に見えないけど確かにそこにあるもの」があるということ。それは、つながり、愛、勇気、我慢する心である。ポケモン GO は目に見えるけど本当にあるのか、ポケモン GO で幸せがつかめるのか。「目に見えないけど確かにそこにあるもの」に価値を見出せる大人がいることが大切。

今日、スーパーはくとに乗車した際、先頭車両運転席の見える席に座っていたところ、運転者は２０代の女性であったことに衝撃を受けた。乗客２００名あまりの命を２０代の女性が運んでおり、その後方にベテラン運転手が立って見ている。そのベテラン運転手は鳥取駅で下車。鳥取・倉吉間はその女性運転手一人であり、プライドをもってプロになろうとしている姿に見えた。

次の世代の人に思いや技術を伝え人の立ち位置は、後方であり、同じ方向に向かってともに進み、（時期が来たら）途中で降りる。伝えていくということはこういうこと。

今後もＰＴＡとともにありたいと思っている。

ケータイ・インターネット

・対象　PTA会員親子 ← 全学年対象

・ねらい　メディアに対する親子のルール作り

開催時期　5月 (なるべく早い時期)
(ルール作りをする為)

講師　社会教育課　寺谷孝志係長

プログラム
1. メディア漬の危険性 ← 実際に体験する
2. 生活習慣、身体への影響
3. イジメ
4. 親子で (学年別) グループワークを行いながらルール作りをする のルール作り

所ジョージと話そう会

●日時：5月○日(金) 19:30〜
●ねらい：父親の家庭内での役割を再確認しよう。
●対象：お父さんを中心に家族みんなに来て頂きたい。
●プログラム：19:00-19:30 受付
19:30-20:30 所ジョージさんのトーク
・わが家の子育て
・パパ友とのつきあい
・ココだけの話
20:30-21:00 質疑応答
21:00-23:00 所ジョージを囲む会

食育

〈小・現校校〉全学年親子
〈大　〃　〉1年生と親

1. 対象
2. ねらい　地元の食材を使って親子で色彩や栄養バランスを考えてお弁当を作ろう!
3. 開催時期　年3回
4. 講師　地元の方々 (料理の上手な人) (栄養士さん) (食推さん等)
5. プログラム
親子で作ろう わが家のお弁当キャンペーン
① 郷土料理を試食 (作り方も学ぶ)
地域の食材を知る (栄養・バリエーション・ダイエット効果など)
② 食材を考えてお弁当の内容を考えよう
(アレルギーに気をつけよう。) お話を聞く
③ お弁当を作ろう

7グループ 研修会「食育」

『君ももこみちになろう!』

1. 対象：中1親子
2. ねらい：学校が終わって家に帰った時に冷蔵庫の食材でご飯を作れる人間になろう。
3. 開催時期：秋頃 (キャベツが安い時)
4. 講師選定：保護者
5. プログラム：① 学年部長 あいさつ (ねらいをきちんと伝える)
② クイズ形式で食材ゲット
・ルール説明 4〜5グループに分かれて、クイズに答える。正解したチームが好きな食材を1つゲットできる。クイズは食と健康に関するものです。
ゲットした食材で調理を行う (保護者の助言をもらう) オリーブオイルは必ず使う。

③ ボーナスチャレンジ
キャベツの千切り大会
グループで1人ずつ出てきてもらって、早さときれいさで競う。
優勝したチームに食材さらに2つ選べる。
④ ゲットした食材で料理する。

夢に向かって!

講師　ガイナーレ鳥取GM
野人岡野雅行氏

開催日　平成28年10月吉日
親子参観終了後

日程
13:00～　講演　日本代表になるコツ
14:00　実技　親VS子(ガチ)
〃　〃　(なごみ)

ねらい　個性の尊重で
チームカアップ

8. 小規模中学校(各学年2クラス)

山間部の隠れた学校

1. 全校生徒・保護者
2. 問題を共通認識した上の仲間作り
3. 年1回(秋の頃)
4. 講師　中学校教員
5. 5限　中学生
6限　保護者
会場　体育館　コの字
テーマ　同和問題
3年間で完結!!

相互の授業参観

生活改善研修会

鳥取県こきば中学校

1 対象　生徒および保護者
校区小学校・幼保園保護者
2 ねらい　生活実態の把握と改善
3 時期　年2回(7月・1月)
4 講師　山口県山陽小野田市教育委員会
5 内容
・生活実態調査・協議
・講演「早寝で人生が変わる!」
・8月～11月大実験
12月 アンケート回答
1月 講演と協議
6 その他　KKポイント　3ポイント
各月目標達成1ポイント
こきばKKポイントとは、PTAバザー等で引換(文房具品)

中1ギャップ生活習慣編
～先輩保護者から学ぶ～

日時：5月17日(水) 19:00
多目的ホール
対象：1年生の保護者
内容：
×先輩保護者からのアドバイス。
×中間テスト得点UP!
×部活と上手につき合う方法
×中学生の生活リズムって…

中学校　郊外にある中学校
生徒数　250人（各学年2クラス）
題目：「生活リズムの乱れが子供をこわす」
対象：親子
ねらい：生活習慣の改善に親子で取り組む
開催時期：　5月
講師：養護教員

プログラム
講義…実態調査の結果と心配される影響についての説明

少人数でのグループ討議

岩美町PTA連合会
球技大会をやめて
「ミニ運動会」をやります

- 対象：小・中学校の保護者
  町内（3小学校、1中学校）
- ねらい：親ぼくを深める
  今まで参加できなかった保護者を呼び込む！
  1大イベント!!
- 開催時期：11月
- ~~プログラム作成~~、
  今までは、バレーボールでしたが、今年は、ミニ運動会をやります

ゆる～い親子会

1 ねらい
- 絆を深める。100%参加。

2 対象
中学年（3.4年生）の親子、先生、地域の方

3 内容（時期：7月下旬　なるみに2016年は7月26日）
みずがめ座流星群
お寺で流星観測（キャンプ）

（1日目）子坊さん修業、観測、肝だめし
座禅、写経など
食事準備
（2日目）ラジオ体操、朝食、逃走中

4 ポイント（参加率アップのために）
- 出入り自由。さぼりOK。

- プログラム
  ① 二回転半ひねり後のジグザグドリブルリレー。
  ② ブッシュドノエル風丸太転がし競争。
  ③ 各校の「ほこり」と「いげん」と「名よ」をかけたすさまじい綱引き。
  ④ 激しさ満さい。ラップでジェンカ。

誰でも参加できる種目です。

優勝校には、但馬○○○詰合わせ!!